

カトリック 仙台教区報

No.239 2020年1月1日

発行

カトリック仙台司教区

〒980-0014

仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL <http://sendai.catholic.jp/>

フランシスコ教皇 被災者たちと分かち合う

東日本大震災被災者との集い



©CBCJ

教皇フランシスコは、11月23日（土）から26日（火）まで、日本を司牧訪問した。長崎、広島、東京での忙しいスケジュールをぬって、11月25日（月）午前、都内のベルサール半蔵門にて、東日本大震災の被災者との集いに参加した。壇上には、被災者の代表者13人が並び、うち3人が震災について証言し、それに答えるかたちで、教皇のスピーチがなされた。

証言①加藤 敏子さん 要旨

私は岩手県の宮古市にあるカトリック幼稚園の園長をしており、加藤敏子と申します。

私はあの津波の日、職場におりました。帰宅中の園児が一人亡くなりました。その日から、子ども



ちに命の尊さと自分の命を守る術を伝えること、子どもたちの命を守る最良の選択をせねばならないことの重さを考えています。

自宅は街ごと津波に吞まれました。その日の朝、家を出るまであった日常が街ごとなくなる。たくさんの方が一瞬で亡くなったという事を受け入れるこ

とができず、私はどこかで考えることをやめてしまった気がします。しかし、ガレキの中で自宅のあった場所に立った時、生かされていること、生きていること、ただそれだけを感じることができ、スッキリとした開放感に満たされたことを覚えています。

この震災を通じて、失くしたものの以上に与えられたものがたくさんありました。世界中の多くの人たちが心を寄せてくださり、人と人とのつながりで助け合って生きていく姿に希望を持つことができました。

今、地球上で困難に陥っている小さな人たちの命がどう守られますようにと祈りながら、生かされている自分に何ができるかを考え、一つ一つ積み重ねていきたいと思っています。

証言②田中 徳雲さん 要旨

私が住んでいた同慶寺は、地域の中心のお寺で、

福島第一原子力発電所から北西に約17Kmの所にあります。農業と漁業が盛んで、町には1000年以上続くと言われる神事「相馬野馬追い」があります。私たちは受け入れ難い現実の中で一時は途方に暮れました。しかし、少しずつ立ち上がり、この現実を受け止め、歩み始めています。



私たちは、便利な時代の恩恵を受けており、被害者であるが、同時に加害者でもあると思います。原発の問題のみならず、天変地異や異常気象、環境問題、戦争、難民、食糧、経済格差などの大きな問題に、いかに対処することができるか。謙虚さを保ち、深く理解し、行うべきことを決断すること。そして何より大切だと思うことは、地球の声を聞くことです。私たちは地球の一部、環境の一部です。このことを理解し、心と身体、生活を整えていくこと。それらを踏まえ、日々祈り、行動していくこと。私たちは今、生き方を問われています。損得ではなく、正しい道を、成長から成熟へ、自らが変化の一部となりましょう。

お会いできて、心から感謝しています。

証言③鴨下 全生（まつき）さん 要旨

僕は福島県いわき市に生まれました。8歳の時に原発事故が起きて、私、弟、母は東京に避難しました。しかし、父は教師だったので、生徒を守るために福島に戻りました。僕と母と弟は慣れぬ土地を転々としながら避難を続けました。いじめにも遭い、死にたいと思うほど辛い日々が続きました。やがて、父も心と体がボロボロになり、仕事をやめました。それでも、避難できた僕らは、まだ幸せなのだと思います。



東日本に広く降り注いだ放射性物質は、8年たった今も放射線を放っています。汚染された大地や森が元通りになるには、僕の寿命の何倍もの歳月が必

要です。大人たちは、汚染も被爆も、これから起きる可能性のある被害も、隠さず伝える責任があると思います。

教皇様、どうか共に祈ってください。僕たちが互いの痛みに関心し、隣人を愛せるように。残酷な現実であっても、目を背けない勇気を与えられるように。力を持つ人たちに、別の道を歩む勇気を与えられるように。皆でこの被害を乗り越えていけるように。

そして、僕らの未来から被爆の脅威をなくすため、世界中の人が動き出せるように、どうか共に祈ってください。

教皇スピーチ 要旨

愛する友人の皆さん。

皆さんとのこの集いは大切なひとときです。アルゼンチンの音楽で迎えてくださりありがとうございます。とくに敏子さん、徳雲さん、全生さんに感謝します。それぞれのこれまでの歩みを分かち合ってください、ありがとうございます。この3名の方そして皆さんは、地震、津波、原発事故の三重災害で、辛い思いをされたすべての人々を代表しておられます。災害は、日本全土と全国民に影響を及ぼしました。全生さんはご自分の証言を終える際に、私に皆さんの祈りに加わってほしいと招いてくださいました。しばらく沈黙の時間をとり、1万8千人にも上るご遺族やいまだ行方の分からない方のために祈りましょう。私たちを一つにし、希望をもって前を見る勇気を与えてくれる祈りをしましょう。



とくに感謝したいのは、敏子さんが指摘されたように、日本だけでなく世界中の多くの方が、災害直後に迅速に動いてくれたことです。祈りと物資や財政援助で、被災者を支えてくれました。そして、このような活動は長く継続させる必要があります。この集いが、集まった全員によって、被災者の方が引き続き多くの必要な助けを得るための呼びかけとなりますように。

食料、衣服、安全な場所といった必需品がなければ、尊厳ある生活を送ることはできません。つまり、地域コミュニティの支援が必要です。一人で復興できる人はどこにもいません。友人や兄弟姉妹との出会いが不可欠です。敏子さんは津波で家を失いましたが、命が助かったことをありがたく思い、助け

合う人々を見て希望をもったと話してくれました。震災から8年、日本は連帯し、一致団結できる人々であることを示してきました。先はまだ長いですが、皆さんの魂をもってすれば、必ず果たすことができます。ですから、皆さんが毎日少しずつでも、前に進んでいくよう励まします。だれかのため、皆さんのため、皆さんの子どもや孫のため、そしてこれから生まれてくる次の世代のためです。

徳雲さんは、私たちに重要な問題を尋ねられました。ご存知のとおり、戦争、難民、食料、経済格差、環境問題は切り離して考えることができません。私たちはこの地球の一部であり、環境の一部です。思うに、最初の一歩は、天然資源の使用に関して勇氣ある重大な決断をすることです。私たちに最も影響する悪の一つは、無関心の文化です。私たちは互いに帰属しているのです。

この意味で特に思い起こしたいのが、福島第一原子力発電所の事故とその余波です。地域社会でのつながりが再び築かれ、人がまた安全で安定した生活ができるようにならなければ完全な解決にはなりません。この意味で、私の兄弟である日本の司教たちは原子力発電所の廃止を求めました。

この時代は、技術の進歩を人間の進歩の尺度にしたいとゆう誘惑を受けています。したがって、このような時に立ち止まり振り返って見るのが大切です。私たちは何者なのか、どのような者になりたいのか省みることが大事です。私たちは未来の世代に対して大きな責任があることに気がつかねばなりません。その意味で私たちは、控えめでつましい生き方を選択することが求められています。敏子さん、徳雲さん、全生さんは、未来のための新たな道を見つける必要を私たちに思い出させてくれました。

愛する兄弟姉妹の皆さん、三重災害後の復興と再建の継続的な仕事においては、多くの手と多くの心を、あたかも一つであるかのように一致させなければなりません。あらためて、大げさにはなく飾らない姿勢で、被災者の重荷をやわらげようと尽くしたすべての皆さんに、賛美と感謝を申し上げます。そのような思いやりが、すべての人が未来に希望と安定と安心を得るための歩むべき道のりとなりますように。

ここにお集まりいただきましたことに、あらためて感謝いたします。私のために祈ってください。神様があなたと、あなたの愛するすべてに、知恵と力と平和という祝福を与えてくださいますように。

参加者からひと言

5年前、パパさま来日のことを聞き、ぜひ大船渡に来てくださいとお手紙を出した。過密日程のためにだめだった。そのかわりベルサール半蔵門での「東日本大震災被災者との集い」にわれわれを招いてくださった。登壇する10人の1人に選ばれた。ありがたや、この機会を逃すまじ。パパさまのおつむに載っている白いお皿帽子（ズケット）の模造品をう

ちの娘に作らせた。壇上で、必死に暗唱したスペイン語の御挨拶とともに差し出した。みなまで言わずパパさまはいきなり左手でご自分の帽子を脱ぎ、右手でまがい物の帽子をつかみ取り、ひょいとおつむに載せてにっこり笑った。「君たちの気持ちはよくわかっているよ！」と優しい瞳が言っていた。まじめなお顔の菊地大司教も通訳のレンゾ神父も仰天して吹き出した。パパさまのおつむに載った手製のズケットはパパさまの慈愛と激励の印としてわが大船渡教会の宝物となった。パパさま、かたじけなくございます！

山浦 玄嗣（大船渡教会）



ズケットを手にする山浦さん（左から2人目）

にこやかな表情と親しみやすさ、そして常に自分よりも他者を優先するそのお姿はキリスト者の模範ですが、驚くべきことはそのエネルギーだと思いました。82歳でこれだけのスケジュールを積極的にこなされる姿勢に、この世における神の国の実現のためにご自分を捧げておられるのだとはっきりと感じ取れます。お疲れの表情はあっても嫌な表情はありません。私はそんな教皇様のお顔にずっと見とれておりました。いえ、今も写真集のお顔を見ながらこれを書いています。いつまでも引き付けられるように見入ってしまいます。本当にイエス様の代理者なのだと感じます。イエス様の回りに救いを求めて集まってきた人々の再現がここにあると感じます。パパと呼びかけ、振り返ってくださる関係性にこの方は「私の」パパなのだと思ひ、何とも言えない喜びに満たされました。パパ様についていくことで神の国の実現の一端を担いたいと思います。

柳沼 千賀子（二本松教会）

教皇様の講話の中で特に心に残った言葉は、「私たちに未来の世代に対して大きな責任があることに気づかなければなりません」という言葉でした。

「人々が安全で安定した生活ができるようにならなければ、福島の事故は完全には解決されません」と話され、将来のエネルギー源に関して、勇氣ある重大な決断をすることの必要性も話されました。

教皇様に福島の地を訪れて欲しいという願いはかないませんでしたが、福島の問題を全世界に発信してくださったことに胸が熱くなる思いでした。また、教皇ミサにおいて皆さまと共に祈りの時を過ごすことができ、心から感謝の1日となりました。

未来の世代に対しての責任を果たすために何ができるのか、祈りの内に今後も支援活動を続けていきたいと思っています。

南原 摩利（カリタス南相馬）

ローマ教皇のやさしさに触れたような感じがしました。ひたすらに、私たち、言葉がわからないものにとって教皇様のメッセージは教皇様自身を感じることでした。その柔らかさから、みんな一緒に生きていこうと、言われている感じがしました。あの空間にいられたことに感謝です。

広畑 裕子（おだかぷらっとほーむ）

カリタスの皆さまがたに1番前列に案内いただき思いがけないました。バイオリンの演奏のもと現れた教皇さまの優しい眼差しに、自然と涙があふれました。震災後の原町教会で、高野会長と共に8年間走ってきたことへの神さまからのお恵みだと感謝と賛美でいっぱいになりました。原発事故からの復興に向けて静かに祈りなされる姿に身近な親しみを感じ励まされました。高校生の若者への、これからの生き方をとりもどすことばと、相手の痛み気付くようなハグでした。82歳のパパさまのパワーと精神力、自分だけ高齢者でただ何もせず、自分だけの安らぎを求めているはいけなと感じ、少しでも人の役にたたなければと思いました。大きな試練に出合ったけれど、これからも苦しみを受け止め原発事故や戦争がない令和でありますよう、お祈りしながら前向きに生きていこうと決心しました。

小林 和江（原町教会）



パパ様の真っ白な姿が、私のすぐ横を通り目を合わせることができました。教皇さまは微笑みながら手を振って壇上にのぼり、代表者3名のスピーチに耳を傾け、あたたかい言葉をかけ抱擁された時、会場内では目頭を押さえる方もいました。私も無心に近い状態で、自然と両手を合わせていました。このような気持ちになるのは初めてでした。

末廣 順士（気仙沼教会）

「キリストの内に一つ」を強く実感しました。過去の不名誉な行動を反省して、それぞれが、その立場や地域でキリストの愛を実践していかなければならないと再認識しました。その決心と力を与えていただいたように思います。 遠藤 信子（石巻教会）

フランシスコ教皇様の集いとごミサに参列する事

が出来て感謝でいっぱいです。抽選に漏れた人たちのためにも、お恵みと祝福を分け与えたいと思っています。 永沼 容子（石巻教会）

最大かつ最悪の悲劇の中にも神はその愛をお示しになるので、私たちは希望を持って生きなければならないことを実感しました。

坂田 寿子（石巻教会）

被災者の発表や教皇様のメッセージは、問題の複雑さと困難さを感じさせるものでしたが、教皇様のメッセージは、広く日本の社会で共有されると思います。 大野 隆（石巻教会）

被災者の証言に心が揺さぶられ、教皇様から各被災者にメッセージが回答されました。福島県被災者は中学生が避難先でいじめられ、生活が壊れた訴えに共に祈ろうと寄り添いの心を示されました。感動の輪が広がったと感じました。

野田 和雄（八木山教会）

…今でも思い出すのは、小さな子どもを抱いて、涙ながらに実状を訴える避難者の姿を見て「この人たちのために何かしよう」と決めた時に熱い思いが胸に湧き上がったことです。…若松の自主避難者のほぼ全員が未信者ですがそのうちの1人が「今回の集いやミサに出てみたい」と言って下さった時、驚きと喜びがあふれました。集いで登壇した3人の被災者の1人鴨下全生君の避難先でのいじめや絶望感などは、自主避難者の経験と似ていると思いました。教皇フランシスコは3名の証言者の話をきっちりとしっかり捉えたメッセージをしてくださりました。一緒に参加した被災者の方は当時は来年まで生きていられない病の中にあったのですが、CTVC（カトリック東京ボランティアセンター）の人と再会し涙を流していました。私も今までの支援者名簿を持って参加しました。足腰が弱い行動が大変な私達に、「荷物を持ちますよ」と言ってくださり、「大丈夫よ…」と言うと「私も何かの役に立ちたいの」と言うのです。支援した人に支援されての教皇との出会いでした。 品川 美枝（会津若松教会）

教皇スピーチの最中、そのお言葉一つ一つに涙が込み上げるのでした。何とも言いようのない感情がおなかの底からわき上がってきました。集いを通して私たちへ向けられたパパ様のまなざしに、どれほど私たちのために心を尽くしてくださっているのかがよくわかりました。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。隣人をあなた自身のように愛せよ。」という聖書のみことばの意味がよくわかります。イエス様の代理、いやイエス様ご自身がパパ様のお姿でそこにおられるように思いました。本当に心の底から被災者の痛みをともに痛み、その苦しみを背負っておられるように思いました。その慈しみに触れた

からでしょうか、集いから数日経った今でも、パパ様のお姿を思い浮かべると涙が止まらなくなることがあります。集いに参加できて本当に幸せです。招いてくださった関係者のみなさまに心から感謝いたします。

新井猛浩（元寺小路教会）

荘厳なアルゼンチンの音楽の中、現れたパパ様は通路前方にいた車いすの方々に祝福をし、自分の十字架に自然に手をあて、最前列にいた10人の代表者一人ひとりに言葉をかけ、握手されていました。3人の被災者のスピーチを目を閉じて聞き入り、しっかりと受け止められていました。…

鎮魂の場であり、また分かち合いの場でもあるこの場は、短い時間でしたがたいへん豊かな時を過ごさせていただき、感謝しています。

上西 博（北仙台教会）

カリスの献上

教皇様の「東日本大震災被災者との集い」へのご出席に合わせ、仙台教区内で記念品の贈呈を検討されていた中、私が制作した漆と蒔絵を施した「カリ



ス」（溜塗・縹紅・葉蒔絵・聖杯・ためぬりさくらもみじまきえせいはい）を選んでいただいたことに、改めて感謝いたします。…日本人であればこそ表現でき得る、私なりの聖具をこれからも生み出していきたいと考えさせられた大きな出来事でした。

須藤 靖典（会津若松教会）

（献上品には、この他に会津の「みしらす柿」があります。）

【東京ドームミサに参加して】

ドームは熱気があふれており、祭壇の両脇の大きなスクリーンに、教皇様が千の言葉より伝える力があるといわれた「焼き場に立つ少年」の写真が何度も映され、私はこみあげてくるのをどうする事もできませんでした。戦争は絶対許されてはならないとの思いを新たにしました。教皇様がパピモービレに乗って会場に姿をお見せになると、大きな歓声と白い旗がさざ波のように振られました。教皇様の祝福が続き、特に子どもを抱擁なさる時には大きな歓声が上がりました。「すべてのいのちを守るため」のメッセージを掲げ、教皇様によるミサが始まりました。その一部始終がスクリーンに大きく映し出され、あたかも私たちは教皇様のお側でミサにあずからせていただく感じがしてとてもうれしく思いました。ミサ中に歌われた聖歌は、ロック音楽に乗せて説教する時もあるという教皇様のご希望に沿ったリズムだったのでは？ 今までに聞いたことがない素晴らしい聖歌に感動いたしました。しばらくその余韻が私の頭から離れませんでした。

鷹嘴 信子（四ツ家教会）

教皇様の、気高く慈愛に満ちたお姿に私自身も何かが変わったような気がしました。気のせいかもしれませんが。もしくは教皇様を通して微妙な聖霊のおこぼれが降りかかったのか…

佐藤 順子（野田町教会）

「焼き場に立つ少年」の写真の裏に戦争がもたらすものと書いたカードを世界に示したフランシスコ教皇様は、長崎、広島で、核兵器はテロですと強い言葉で、核廃絶を訴えました。私たち福島に住むものにとりましても8年前の核の平和利用とされた原発の事故により、目に見えない放射線による恐怖が多くの人々の心に分断を生みました。…私は、東京ドームの教皇ミサに教会の仲間とあずかり、白いカートに乗った教皇様の祝福を受けながら涙がとまりませんでした。教皇様を通して神様が共にいてくださると実感したからです。

駒田 瑞穂（松木町教会）





©CBCJ

事前に、教皇フランシスコ訪日公式聖歌「すべてのいのちを守るため」とオフィシャルテーマソング「PROTECT ALL LIFE ～時のしるし～」を聞きながら練習をしました。…しばらくしてパパ様の姿は見えませんでした。ミサに参加している人々のどよめきが聞こえてきました。パパ様は小さな子どもたちを一人一人、丁寧に抱擁し、接吻していました。パパ様が来たら「パパ様、パパ様。」と叫びました。



©CBCJ

ミサの説教でパパ様は「明日のことは明日案じよ」と…心配することがないのだと思いました。教皇フランシスコのミサにあずかってたくさんの恵みと皆さまの絆を感じることができました。…いつもの喜多方のミサは10人くらい、あるいは会津若松のミサでも参加人数は30人くらいの家庭的な小さな共同体の中にいます。5万人の熱気はすさまじく感じました。これだけ多くの人々とごミサをささげられることは本当に素晴らしい恵みです。また、喜多方・会津若松で教皇ミサに参加できなかった方々と共に一つになってお祈りができました。喜多方・会津若松でお留守番していた信者さんお一人お一人のお祈りのおかげ、私たちは素晴らしいミサにあずかるこ

とができました。

大房 きよい（喜多方教会）

大きな歓声と拍手と小旗を振った約5万人がパパ様の思いに応えた感動のひと時でした。しばらくの静寂の後、教皇ミサが執り行われました。教皇様は説教の中で「すべてのいのちを守るため」をテーマと目標にし、すべてのことに無関心ではなく、すべての人と協力と対話を重ねる事が大切なので、私たち一人ひとりが身近なところで社会に貢献しましょう、と述べられたのだと私は解釈しました。本当に思い出に残る一日でした。

横山 直人（一本杉教会）

「あなたに、話がある」と書かれたフランシスコパパ様の笑顔の写真のポスターを見た私は、実際に教皇ミサにあずかることができ、とてもうれしく、胸がいっぱいになりました。説教の中で「キリスト者の共同体として、私たちは、すべてのいのちを守り、あかしするよう招かれています。知恵と勇気をもって、無償性と思いやり、寛大さとすなおに耳を傾ける姿勢、それらに特徴づけられるあかしです。それは、実際に目前にあるいのちを、抱擁し、受け入れる態度です…」と。イエス様が私たちに望んでおられることと感じました。また「個々の人や状況を判断する唯一有効な基準は、神がご自分のすべての子どもたちに示しておられる、いつくしみという基準です。」というフランシスコパパ様のお言葉を心に刻み、感謝と祈りを捧げて実践し、歩みたいのです。

夏井 紀子（一本杉教会）

ついにこの日が来ました。まず圧巻だったのが約300人の司祭の入場です。しばらくして教皇様がご

入場。映像で拝見するのと変わらず、気さくでお優しいお姿に感動し「よくぞ日本へいらっしゃいました」という思いから終始涙が止まりませんでした。教皇様の一挙一動に威厳があり御ミサにあずからせていただけたのはまさに奇跡です。また 私の印象に残ったのは答唱詩編を歌われたシスターの声の美しさです。今まで聴いたどのアーティストよりも素晴

らしい歌声でした。説教で常に弱者に寄り添われている教皇様のお言葉に「まさにキリストがここにおられる」と感じました。日本に來られて教皇様が長崎、広島で発せられたメッセージが全世界の平和につながりますようにお祈りいたします。アーメン

佐藤 はるみ (西仙台教会)

各地区からのお便り

第8地区より

＜ アナムネシスとピースの集い

(想起する民の集い) を終えて ＞

多くの外国の方々が暮らす現在のこの国にあって、私たちカトリック教会の活動の一つとして、宗教・国籍にとらわれることなく集える場・サードプレイス(第3の居場所)を作ることは、キリストにつながる私たちの使命であると思います。そこで、フランスコ教皇が来日される本年、いわきの私たちも少しでも教皇の志を共にしようと集いを企画しました。

しかしながら、このタイトルを信徒の方々に理解してもらうことは難題でありました。また、これを『回勅 ラウダート・シ』とどのように結びつけるかは、さらに困難な事でありました。

「共に暮らす家(地球)を大切に」を基にして東日本大震災の総括を出発点としたのですが、話は社会構造的問題にまでおよび、まさに戦いでした。しかしながら、ここに『ラウダート・シ』の明(先見の明)がありました。

毎週、ミサの説教で、狩浦正義神父から乗り越えようと励ましを受け、派遣を新たにして臨むうちに、もとより経験豊富な信徒たちが、自ら統制し仕事を分担し段取りを組んで臨戦態勢に入って行きました。教会委員長として決断を迫られる場面が多々ありましたが、難問は分割せよという経験則から、出来ることから始めるという結論に至りました。結果、イベントとしてのミッションを成し遂げることができました。



9月15日(日)、9時半からのミサの後、外国人信徒と世界平和を考えるディスカッションが行われました。その後、バーベキューで昼食をとり、各国(ベトナム、フィリピン、スリランカ、中国、韓国、日本)出身者の歌のライブによる屋外コンサートが開かれま

した。

結局、このイベントへの参加者は80人以上におよび、楽しい時間を過ごしました。費用もセミプロのバンドを入れて10万円以下で仕上がりました。まさに強者ぞろいの信徒たちです。委員長の私とは、失敬続きでしたが、外国人の若者が助けてくれました。私は誇らしくみんなの前でこう話しました。

「この私たちの子どものような若者たちに、敬意と愛情をもって接してください」

これがその日のハイライトでしょう。

1週間後に反省の場を設けたのですが、驚いたことに、今後も継続するためにと信徒によるアイデアが既に計画されておりました。私は狩浦神父より要請を受け、これに応えるため努力しましたが、結果は信徒が自らの意思で想起したものになっていました。狩浦神父は本当にすごい人です。

志賀 秀輝 (いわき教会)



第4地区より

< 第4地区連絡協議会開催 >

於 気仙沼教会
日本列島で、自然災害が相次いでいます。被害を受けた方々に心よりお見舞い申し上げます。

気仙沼も先の震災で被害を受けましたが、全国の方々が神様のおかげでここまで復興してきました。



しかし、私たちの教会の信徒も高齢になっております。日曜日の御ミサには、急な坂道と階段を登ってきた所にあるマリア像の前で一礼して聖堂にたどり着くと、フーっと一息ついて、天におられる私たちの父に向って両手を合わせて十字をきります。

この気仙沼教会で、9月7日（土）第4地区連絡協議会が開催されました。はじめのお祈り、その後、ロペス神父のギター演奏で、全員、声を合わせて歌をうたいました。

楽しい雰囲気の中で、活発な意見交換があり、またおしゃべり的な発言もありましたが、意義の深い協議会でした。これも、ひとえに地区制度ができて、浸透してきたおかげではないでしょうか。

これからも、地区制度の発展を心より、お祈りいたします。

末廣 順士（千厩教会）

第5地区より

< 合同堅信式 >

第5地区の合同堅信式が晴天の7月7日（日）



東仙台教会で行われた。司式は、平賀徹夫司教・森田直樹神父でした。

今年は5人の方々が堅信の秘跡を受けられ

ました。ミサ後、平賀司教、受堅者を囲んで茶話会が行われ自己紹介や新たな信仰生活スタートの決意を、それぞれに語っていただきました。

岩崎 千秋（北仙台教会）

第7地区より

< 第7地区大会開催！ >

第7地区の大会は2年ごとに行われている。今年は開催の年で、9月16日（月）、福島市の松木町教会を会場として開催された。午前には堀江節郎神父（釜石教会居住）をお招きし「福音の喜び」というテーマでご講演いただいた。



堀江師は約47年間にわたってブラジル、東ティモールで宣教活動され、今年春から仙台教区の第3地区を担当されている。長年、海外で宣教されてきたご自身の経験を交えながら、またフランシスコ教皇の『使徒的書簡 福音の喜び』の中の文言も交えながら、「燃えるような気持ち」を持ち続けておられる神父のお話を参加者は熱心に聴いた。

午後からは講演を聴いての質疑応答に続いて幸田司教主司式、共同司式は堀江神父、第7地区長のエメ神父、ノーサル神父、第8地区から板垣神父、狩浦神父が加わりミサが行われた。このミサの中で堅信式も行われ、松木町教会から3人、野田町教会から2人、会津若松教会1人、郡山教会から3人、いわき教会から1人の合計10人の方が堅信の秘跡をいただいた。

渡邊 祐子（野田町教会）



第3地区より

< 北上教会で巡礼者大歓迎 !! >

おととしの12月、聖堂の窓をステンドグラスにリニューアルした。その縁で、東仙台教会の信徒が北上教会に巡礼に訪れた。



令和元年6月30日(日)東仙台教会の巡礼団一行、総勢41人が大型バスで北上教会を来訪した。途中水沢教会でのミサ後、高橋昌神父の案内で後藤寿庵廟へ立ち寄った。寿庵ロードではマリア観音像等見学しながら、北上の展勝地へ到着した。

高台にある農家レストランの2階を貸切り、北上教会の信者と合流して昼食会を行った。そこは眺めがよく、北上市街を一望にしながら、楽しいひと時を過ごした。その後、展勝地レストハウスでお土産の買い物をして、北上教会には午後2時40分ごろ到着した。



北上教会ではまず聖パウロ女子修道会のシスター菊池の先唱でお祈りを唱えて、次にステンドグラスの解説プリントを参照に分かり易く説明いただいた。説明解説者は東仙台教会の信者であり、北上教会ステンドグラス製作者の「アトリエ ラ・ルミエール」の和野由美さんをお願いした。ステンドグラスは聖書に基づいた窓4枚のパーツで再現されたもので、説明には皆、興味深く熱心に聞き入っていた。説明後は、ティータイムの休憩、手作りコーナーでの交流、最後に全員で記念撮影をし、午後4時ごろお見送りして帰仙した。梅雨空のどんよりした日でしたが、お祈り後うっすらと日が差し込んで、聖堂のステンドグラスに一層の綺麗な光を放っていた。

皆さん、一度いらしてみませんか、お待ちしております。

佐藤 或子(いくこ) (北上教会)

教区の諸活動

日本カトリック部落差別人権委員会 2019年シンポジウム 開催

「強制不妊手術 被害者の声を聴く」

～憲法違反の優生保護法はわたしたちの幸せを奪った～

日時：2019年9月28日(土) 14:00～17:00 会場：カトリック元寺小路教会 大聖堂

主催：日本カトリック部落差別人権委員会 共催：カトリック仙台教区人権を考える委員会

旧優生保護法の下で不妊手術を強制され、憲法13条が保障する権利を侵害されたとして全国で裁判が起こされています。今年の5月28日、仙台地方裁判所で全国初の判決が出され、優生保護法が「違憲」であるとの判断の一方、原告の賠償請求は退けられました。



黒坂愛衣さん

日本カトリック部落差別人権委員会では、実際に被害を受け裁判の原告となられた方々の声に

耳を傾け、なぜこのような事件が起きたのか、国の責任とは何か、市民一人一人にどのようにかわるのか、そして再び同じような事件を起こさないためには、どうしたら良いのかをともに考える機会となるシンポジウムを開催しました。

当日は、手話通訳や要約筆記でも表示されました。

最初に仙台教区長平賀徹夫司教のお祈りに続き、日本カトリック部落差別人権委員会秘書の太田勝神父の挨拶からシンポジウムが始まりました。

第1部では、優生手術被害者とともに歩むみやぎの会共同代表で東北学院大学准教授の黒坂愛衣さん

の司会で、旧優生保護法訴訟仙台裁判原告の飯塚淳子さん(仮名)、佐藤路子さん(仮名、原告義姉)、東二郎さん(仮名)の皆さんからお話ししていただきました。その後旧優生保護法訴訟全国弁護団長である新里宏二弁護士から仙台地裁判決の意義と課題をわかりやすく解説していただきました。



新里宏二弁護士

飯塚さんは、中学3年の春、知的障害があるとされ、障害者施設に入所させられ、卒業後職歴に連れられ「宮城県中央優生保護相談所附属診療所」で不妊手術を受けさせられたそうです。その後、自身の優生手術に関する情報開示請求をしたものの、県の回答は記録は破棄されているというものでした。

そこで2018年5月17日第2次原告として仙台地裁に提訴しました。飯塚さんは無理矢理知的障害者とされ、なんの説明もなく不妊手術を受けさせられた苦しみを涙ながらにお話ししてくださいました。

佐藤さんは、原告である佐藤由美さん(仮名)の兄の妻。結婚後義理の母から、由美さんが不妊手術を受けている事を知らされました。その後、日本弁護士連合会が2017年2月に「旧優生保護法下にお

いて実施された優生思想に基づく優生手術及び人工妊娠中絶に対する補償等の適切な措置を求める意見書」を出したことを知り、新里弁護士に連絡。由美さんの優生手術に関する情報開示を県に請求したところ、記録が残っている事が判明し、2018年1月30日、全国初の「旧優生保護法裁判」を仙台地裁に提訴しました。佐藤さんは提訴するにあたって家族の間でもさまざまな意見があったそうですが、今ではこんな事はおかしいということで応援してくれているそうです。

東さんは第4次原告の一人。昭和40年代に宮城県内にある知的障害者等の入所型職業訓練施設に入所。18歳の時施設の仲間と一緒に「宮城県中央優生保護相談所附属診療所」に連れて行かれ、不妊手術を受けさせられました。その後「旧優生保護法裁判」の報道を見て、自分自身も被害者である事に気付き、2018年12月17日仙台地裁に提訴しました。東さんは、ご自身の顔を出すことで同じ苦みを背負った仲間に気づいてもらいたいと訴えています。

第2部は、日本カトリック部落差別人権委員会事務局の前川徹さんの司会で質疑応答が行われ、黒坂さん、飯塚さん、佐藤さん、東さん、新里弁護士に参加者からのさまざまな質問に答えていただきました。

最後に太田神父からは、聖書の言葉を通して痛みへの共感、人との交流が大切。お互いが温かい社会、許しあえる社会にできれば良いとお話ししていただき、終了しました。

関 毅(元寺小路教会)

平和旬間講演会と平和祈願ミサ

～平和を願い 神さまからいただいたいのちの大切さに向き合う～

カトリック正義と平和仙台協議会主催による平和旬間講演会とミサに、那覇教区ウェイン・バートン司教をお招きし2019年8月12日(月・振)に元寺小路教会大聖堂にて開催しました。

現在日本カトリック正義と平和協議会担当司教に就任、会長の勝谷太治司教とともに正義と平和のために働いておられます。

ウェイン司教は、日本に返還された直後の沖縄に、20代で宣教師(カプチン・フランシスコ修道会)として来日しました。苦しい差別の歴史の中でいのちを尊ぶ文化をつくりあげた沖縄は、ほんの30年前は自分の母国が地上戦を戦い、民間人を殺害した土地でもあります。沖縄の人々は宣教師であった彼を許し、温かく迎え入れ、強い絆が生まれました。ウェイン司教の、そのような宣教生活の中で育んだ、平和への静かで強い思いを伺うことができました。私たちは、ふだん沖縄の人々の苦しみを身近に聞く機会がありません

と思います。司教のお話を通して、それぞれに学びの時となり、講演後の祈願ミサでは心をついて祈りを捧げました。

木元 範子(北仙台教会)



2019 年度 宣教司牧評議会

2019年9月23日（月・祝）、仙台司教区センター会議室にて、今年度の宣教司牧評議会定例会が開催された。

第1議題である第1回宣教司牧大会にむけての各地区での準備進捗状況報告と第2議題である「召命について」について、各地区の思いなどが報告された。

その結果、2019年10月14日に開催が予定されていた第1回宣教司牧大会の実施については、準備がととのうまで延期（開催時期未定）することが確認され、第2議題の「召命について」は、今後も引き続き検討していくことが、全会一致で確認された。

上野 隆（西仙台教会）



日本カトリック医師会仙台支部 2019 年度夏の交流会

「ルイス・デ・アルメイダとわたしたち」

2019年7月21日（日）、日本カトリック医師会仙台支部の夏の交流会が福島県南相馬市の原町教会で、開かれました。



幸田和生司教および当医師会の指導司祭である鷹觜達衛神父の共同司式によるミサに、原町教会の皆さんと一緒にあずかり、引き続いて幸田和生司教による「ルイス・デ・アルメイダとわたしたち」のテーマで講演をいただきました。会の参加者は原町教会の方々を含めて30人でした。幸田司教は日本カトリック司教団の『いのちへのまなざし』【増補新版】の出版に携われ医療倫理について大変詳しい方ですが、当日は戦国時代に来日し日本で初めての「病院」を設立したポルトガル人ルイス・デ・アルメイダの生涯についてお話をいただきました。

アルメイダは1525年ごろリスボンで生まれ、医師免許を取得、1552年に貿易のために来日、日本とマカオの交易で活躍し貿易商として成功しますが、当時日本でフランシスコ・ザビエルの宣教を継承していたコスメ・デ・トーレス神父の影響を受けて豊後府内（大

分県大分市）に私財を投じて乳児院を建設、さらに外科、内科、ハンセン氏病科を備えた病院（府内病院）を、1557年に設立します。そのため大分市は日本の西洋医学の発祥の地と言われています。講演ではアルメイダの像をはじめ多くの記念像、碑、絵画が大分市に残され、また大分市医師会立病院の名にその名が継承されるなどアルメイダが市民から尊敬されている様子が示されました。アルメイダは医療のみならず五島列島、長崎、天草など多くの場所で宣教活動を進め、1580年にマカオで司祭叙階を受けています。そして本能寺の変の起きた一年後の1583年、宣教の地の天草・河内浦（熊本県天草市）で帰天しています。

私たちはよく「ご大切に」と口にしますが当時、「神の愛」は「デウスのご大切」と訳されていたそうです。アルメイダの働きはまさに「デウスのご大切」を伝えることにありました。彼の働きは当時のキリシタンが暗唱していたといわれる教理書『ドチリナ・キリシタン』にある色身（しきしめ・肉体）とスピリッツ（霊的）に関する「慈悲の所作」に則ったものでした。これは色身に関する第一のこととして、飢えたるものに食を与えること、第四に 病人をいたわり見舞うこと、第七に死骸を納むることなどが挙げられているように、現代医療の課題でもある医療・福祉・終末期のケアまで包括した活動でした。

講師の幸田司教は我々がアルメイダから学ぶこととしてすべての人の神の子としての尊厳を守る、いのちの平等性と連帯性を挙げられました。講演を通して現代の医療が直面している多くの倫理的な課題を平等性と連帯性を鍵に考えてゆくことを学びました。

講演の後、まだ震災の傷跡の見られる原町駅前で講師の先生を囲んで懇談の場をもち解散しました。

日本カトリック医師会仙台支部 石出信正

「仙台教区外国人ヘルプデスク」からお知らせ

「仙台教区外国人ヘルプデスク」は仙台教区宣教司牧評議会のもとに置かれた、外国籍信徒のための相談窓口です。外国籍信徒が日常生活で抱えるさまざまな問題について電話で相談を受け、その内容に応じて助言を行い、それぞれの問題を解決する上で適切な支援団体につなげ問題解決のお手伝いをするを、主な役割としています。メンバーは、「仙台教区人権を考える委員会」から派遣されたスタッフと、同委員会が人選した外国籍信徒や、さまざまな言語に対応できる司祭で構成されています。

2004年5月に「仙台教区人権を考える委員会」が発足した際に、溝部脩司教の意向を受け、「教会は多国籍である」との認識に立ち、「外国籍信徒と共にある教会」を活動テーマとすることとなりました。その後、2006年11月に平賀司教に「仙台教区における外国籍信徒に関する取り組み」についての答申を行いました。この答申では、仙台教区の外国籍信徒を巡る状況を踏まえ、「教会は多国籍である」という認識を司祭、修道者、信徒が共有した上で、教会内に外国籍信徒が日常生活のなかで抱える困難についての相談に応じ、支援するための「外国籍信徒のための相談窓口」が必要である、との提言

がなされました。それを受けて、2007年3月に仙台教区宣教司牧評議会において「外国籍信徒相談窓口」の設置が決定しました。そして、同年8月に「カトリック仙台教区外国人ヘルプデスク」が設置され、今日に至っています。「ヘルプデスク」は電話による相談を受け付けております。

また、「仙台教区人権を考える委員会」ホームページの項目「Help Desk for Foreigner」からは、複数の外国語によるチラシがプリントアウトできます。皆さんの身近に、さまざまな問題を抱えている外国籍信徒の方がおられましたら、ぜひ「仙台教区外国人ヘルプデスク」のことを紹介していただければと思います。 中津俊樹（北仙台教会）

ヘルプデスク ☎ 080-1855-5149

（月曜日～土曜日 10:00～18:00）

「仙台教区人権を考える委員会 HP」

（URL:<http://hrccds.info/index.html>）

仙台白百合女子大学カトリック研究所 特別講演会

「歴代ローマ教皇と私」

講師 加藤 一二三 氏

2019年9月28日（土）、仙台白百合大学において、東京から同大学客員教授の加藤一二三氏を招いて、「歴代ローマ教皇と私」と題する特別講演会が実施された。

講演では、聖ピオ10世をはじめ、聖ヨハネ23世、聖パウロ6世、ヨハネ・パウロ1世、聖ヨハネ・パウロ2世、ベネディクト16世、など歴代教皇に加えて、11月下旬に来日する教皇フランシスコの耳寄りなエピソードなどが次々と飛び出した。

また、自身の将棋人生、聖地巡礼、バチカンでのコルベ神父の列聖式参列、猫との交流などの個人的体験を織り交ぜながら、ローマ教皇が信者のみならず全世界に与える測り知れない影響力が伝わる白熱講演だった。会場では、皆が大きくなすき、時に笑いを誘われ、共感の温かい輪が広がった。

（仙台白百合女子大学HPより）



南相馬より

台風 19 号の被害甚大

先日の台風 19 号の発生により南相馬市の周辺もかなり被害を受けたので、まずはそちらの現状をお伝えさせていただきたいと思います。

カリタス南相馬の周辺は、それほど被害は大きくなかったのですが、市内の鹿島区においては、川の氾濫により床上浸水の被害、そして断水がしばらく続いたことにより水の支援が急遽必要となり、カリタス南相馬に備蓄していた長期保存用の水や非常食などを必要な地域に運びました。また長引く断水のため、作業用の水の確保の必要性も感じたのでカリタス南相馬で 500ℓ 入る水のタンクを購入しました。お隣の相馬市での被害も大きかったので原町教会の（相馬市の）信者さんのお宅に支援物資を、お届けすることができました。

丸森町では、さらに被害が甚大であったので社会福祉協議会に連絡を取り、必要な支援物資（ブルーシート、ゴム手袋、マスク、水、衛生用品、非常食、衣料品など）を 2 度に分けて運びました。現在は、企業が入り物資は充足してきたとのことですが、交通網が寸断されて物資がすぐに入らない時期に、早期にカリタス南相馬から支援できたので担当の方からは感謝のお言葉をいただきました。



災害ボランティアセンターの動向を注意深く見ていたところ、南相馬の近辺では、相馬市が開設日決定、丸森町、南相馬市が開設準備中とのことで、相馬市の活動に参加できるよう準備しておりましたが、南相馬市の社会福祉協議会よりカリタス南相馬に直接連絡があり、運営側として一緒に活動してほしいとの要請があったため、災害ボランティアセンター立ち上げの準備段階から参加させていただき現在に至っています。

南相馬市の災害ボランティアセンターは、当初、10月末で閉じる予定でしたが、週末に雨が続いたことと、2 次災害を招いたことにより、活動が進まずニーズが 20 件以上残っているとのことで 11 月 11 日まで延長という形になりました。南相馬市では、床上浸水が 100 件以上あるとのことで、現在もボランティア活動が毎日行われています。

鹿島区で断水が続いていた時は、使われていなかった仮設住宅を解放し、洗濯やシャワーが使用できるような措置が取られていましたが、ようやく生活用水として復旧し 1 週間前にやっと飲料水としても飲むことが可能となりました。

2 度目の大雨が降り続き、南相馬市全域に避難勧告が出た時には、カリタス南相馬の敷地内駐車場も用水路の水が流れ込み、危うく床上浸水になるところでしたが、難は逃れました。

福島県における台風による水害被害が多かったのは、震災後、除染や工事のために山をどんどん削って自然を破壊していることにも要因があるのでは、と個人的には感じています。とにかくこれ以上二次被害が増えないことを願うばかりです。

福島県内のボランティア参加者は、不足しているとのニュース記事を見ました。カリタス南相馬から丸森町のボランティアにも参加していますので、南相馬市の活動が終わった後も引き続きご参加くださるようお願いいたします。

一般社団法人カリタス南相馬
副所長 南原 摩利

いわき より

オリーブの木とともに

2011 年の震災時、私は原発 20 キロ圏内の楡葉町に住んでいました。地震での被害は家族にはなかったのですが、原発事故により突然住む家も、何も無い生活が始まりました。



避難所で、初めて原発事故を知り、母方の叔父が津波で亡くなり、親類のほとんどが家を流されたこと、父の親類すべてが原発の避難者となりました。長い避難生活で、体調を崩した父は帰還を望んでいました。帰宅困難地域となった町で私は防護服を着て、自分の家をいつでも帰れるように少しずつ準備していきました。ある人には「汚染された所になぜ帰るのか」と言われました。

しかし、人の気配のない町の中でも木々は茂り、庭の花は毎年花を咲かせ、イノシシやタヌキ、キツネなど今まで近くに見たこともなかった動物などが懸命に生きているのを見て神様はこの地も決して見捨てはしないと思うようになりました。

私は避難生活を1年過ごすごとに庭にオリーブの木を植えました。ノアの箱舟で人類に希望をもたらした木です。この木が育ってくれることが私の希望の一つになると思ったからです。約4年の避難生活で4本の木を植えました。私の腰より低かった木は初めの2年間で植えた木は頭をはるかに超えました。まるで神様がこの地を見捨てないとおっしゃるように。

2015年、町は解除され、私は檜葉町に帰りまし

た。残念ながら帰還を待たず父や親類の数名は亡くなりました。いまだに帰宅困難地域の親類もいます。

高校生で広島を訪れ、20代で長崎を訪れた自分が、福島で原発事故に被災したこと。震災時、町で唯一のカトリック信者の私がこの地で生活し祈り続け見守ることが、私なりの使命の一つではないかと思っています。オリーブの木とともに・・・

高野 幸子(いわき教会)

司 祭 紹 介

川崎 忠紀 神父

(1)司祭になりたいと思った動機(きっかけ)はどのようなことですか？

会社員のときに出張が多く、ある小さな村の教会の神父さんにお話をうかがう機会がありまして、たわいもない話をしていたのですが、とても楽しくお仕事をされている印象を受けました。今の自分のように楽しんでいると感じまして、神父さんのお仕事も楽しいんだ！と、知りました。

地元に戻ると教会学校のお手伝いにちょっと入れていただいて、そこでいろいろと不思議な体験をしたこともです。不思議と言いましても、私は幽霊関係が大の苦手です。おかずさまでこの関係の体験ではありません、神に感謝です。

(2)司祭としてこれからも大切にしたいことはどんなことですか？

神さまに問い続けることと、困ったときの神頼みです。

(3)今働いている地域の信徒、仙台教区の信徒へのよびかけ(希望)があれば、教えてください。

私共の生活は、週日がんばって、主の日に集まりそ

こからたっぷりとお恵み(エネルギー)を頂いて週日へと向かって行くのが基本だと思っています(主の日にお仕事の方を除いてのこととなりますが)。ですから主の日がとても大切だと思います。もし主の日がそうでないのならば、その要因を見つけて改善してゆくことをお勧め



します。それは主の日は、とてもパワフルだからです。

(4)その他、神父を知るためのエピソードや、アピールなりたいことなどなんでも。

会議のため仙台に行き誰も来ていないので聞いたところ、今日じゃないと、お返事をいただきました。また会議の日になったので出かけたところ今日も違うところのお返事でした。二度も続けて、トホホです。

ホセ・アウセンシオ・ロペス神父
(グアダルペ宣教会)

召命物語

私は3つの段階で、日本で宣教師になるための召命があったことを思い出します。それは、私が小学校、高校、そして、神学校の1年生の時でした。

子どもの頃、私はたくさんの聖人たちの伝記を読むのが大好きでした。私はフランシスコ・ザビエル(イエズス会)の人生に出会いました。日本のフランシスコ・ザビエルの宣教師生活にとっても影響を受けたので、父に司祭になりたいと言いました。しかし、父は怒って私を厳しく叱りました。絶え間なく続く説得の末、父は神学校の高校に入学することを許可してくれました。

神学校の高校生の時、私はペトロ・アルペ(イエズス会士)の本『私は原爆を生きた』を読みました。この本は、広島での原爆の恐ろしい影響について、生々しく詳細に説明しています。数千人が亡くなり、数千人が致命傷を負った様子は、私の人生に大きな影響を与えました。

神学生としての1年目のころ、日本は戦争に負けたかもしれないが、決して闘志を失ってはいないということが、わかってきました。私は、日本人の克己心と決意は別として、彼らの心の中には、国家を再建し、人々を立ち上がらせる何かがあるに違いないと思いました。

司祭として叙階された直後、私はさらに研修するためにローマに派遣され、その後、6年間メキシコの神学校で神学を教えました。私が日本を愛していることを知っているのも、特に面談もなしで、1976年、上司により日本の仙台に行くように任命されました。

仙台教区への貢献

私が43年前に日本に来たとき、私は教区信徒の問題と懸念が物質的なニーズにあることに気付きました。一部の人はまだ戦争から立ち直っていないということ、それは当然のことでした。これらの必要に応えるために、多くの修道会は、病院、ホスピス、孤児院を設立しました。

現在、多くの日本人はある程度の物質的な充足を得て生活しています。しかし、人々のニーズは変化しています。それは心理的、精神的、道徳的な事に関わることです。これが、私が人々と一緒にいて、イエスの教えを彼らに示したいところなのです。私は人々に、彼らの日常生活の中で神の言葉の意味を伝えたいのです。

教区の信徒への希望と願い

教区の信徒に対する私の希望は、すべての人々、特



に信者でない人に手を差し伸べ、関わっていく宣教師自身になることです。宣教師司祭の役割は、神の愛が人々に流れ、彼らを神につなぐパイプになることです。パイプのようになることは、司祭の役割だけでなく、

信徒の役割でもあります。私たちは教区のリーダーを促進し、育成しなければなりません。

日本の教会は高齢化してきました。多くの外国人が教会に来ています。これらの外国人は働くためにここにいるだけではありません。彼らは社会と教会に貢献したいという願望を持っています。外国人と日本人がお互いの信仰を分かち合うなら、教会が非常に豊かになるでしょう。

首藤 正義 神父

ミサに生かされて

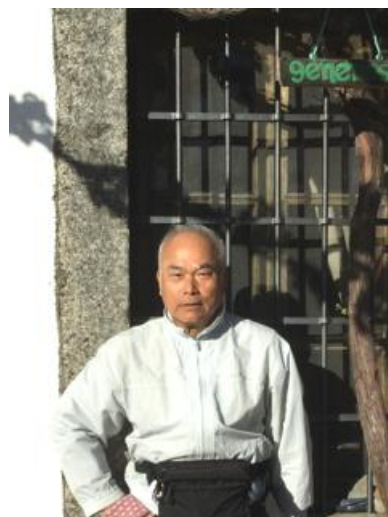
私が洗礼を受けたのは小学校3年生の時である。「東北のクリスチャン村」と言われた宮城県の米川で、第一回目の洗礼式が1955年7月10日に学校の体育館を会場に行われた。その時175名が洗礼を受けた。その中の一人として、私もいた。

その後、聖堂が完成してからは毎日、ミサに通った。侍者をするためである。冬の侍者は辛かった。前日用意した水に薄氷が張るような、暖房のない聖堂で司祭

が毎日ミサを捧げ、参加者は侍者一人である。それでも司祭は毎日ミサを捧げ、私も同じように、侍者をするために教会へと通った。そして今、私は司祭叙階以来、ミサを捧げている。

十数年前、ある人から褒められた。「ミサにあずかって、祈りに深く入る事ができた」というのである。その方は日本語を全く解さない外国の方である。

時々、「毎日同じミサを捧げて、機械的にならないのですか？」と尋ねられることがある。また、批判的に「司祭は聖体を作るためのマシーンだ」という言葉を耳にする事もある。それらの言葉に対してコメントする言葉を持たない。言葉というものはそれを発する人自身を表すものである。



1975年、神学生の時、5か月ほどインドにいた事がある。そこで、貧しい人のために一生懸命働いている修道士たちと出会った。その時、私にはこの人たちの様な生き方はできない、と感じた。なぜなら、彼らの生活

は単調そのもので、毎日が同じ事の繰り返し、と思った。

ところが、しばらく彼らと生活をともにする中で、彼らの生活は決して同じ事の繰り返しではない、ということに気づかされた。彼らの毎日は一日一日が新しいのである。その内面を見ることなく、目に映る外面だけを見ていた時には気づかなかったことである。

司祭叙階以来、ミサを欠かすことなく捧げてきたと先に記したが、私にとってのミサはインドの修道士のそれと同じなのである。初めてミサを捧げた時の同じ気持ちをもって、いつもミサを捧げさせてもらっている。

ミサの立ち居振る舞いも同じことである。ミサに対する自分の信仰表明だと思っている。自ずと一つ一つの言葉が大切になり、唱えるというよりも、祈るという言葉がふさわしい。

三十年ほど前、宣教師としてブラジルのアマゾン流域で働いていた時の事を思い出す。河の中洲にある小さな村ボン・ヴェントでのことである。年に数えるほどしかミサがない村である。雨季に備えて高床式になっている聖堂で、ミサの準備をしながら、係の者と言葉を交わしていた時、一人の老人が聖堂に入って来た。彼は静かにひざまずき、恭しく頭を深く下げ、そしてベンチに座ったのである。

ミサ前のひとときは子どもが走ったり、犬がほえたりして騒音そのものである。そんな中でこの老人のひざまずいて礼拝する姿は、喧騒（けんそう）の中に一瞬の沈黙が訪れた様な、崇高なものとして私の目に映

った。これから行われるミサに対する彼の心がその姿の中に現れているのを見る思いがした。

人は自分の信仰表現ができないことを周りのせいにしてしまう事が多い。ミサ前、聖堂でおしゃべりが多い、聖堂が祈る雰囲気欠ける、とか。しかし、ボン・ヴェントの聖堂は、普段は子供たちの学校として使われ、聖櫃もないし、十字架もない。祭壇は先生が授業で用いる小さな机である。窓はなく、屋根はコケイロで葺かれた小屋である。

しかし、その様な中でボン・ヴェントの老人は、自分の信仰をその立ち居振る舞いで表現した。その姿は三十数年経った今も私の心に生き生きと生きている。

もう一人忘れられない人がいる。ピカインという村のエネジーノさんである。彼はハンセン病を患っていた。そこでミサがある時には、先ず彼を訪問することにしていて。彼はそのことを知っているのに、不自由な身に洗い晒しのワイシャツを着て、聖体拝領の準備

をして待っていてくれるのである。聖体をいただく時、指のなくなった手を合わせる彼の敬虔（けいけん）な態度にはいつも感心させられた。聖体拝領が終わると、ラジオから流れるリーノ司教さんのお話を語ってくれた。そして、私が船でカペラ（聖堂）へ向かう時は、不自由な両腕で身体を運びながら、河岸まで見送ってくれるのであった。

信仰は、周りがどのような状況であろうとも、また自分自身が大変な重荷を背負っていようとも、その中でその人がどのように生きるかにかかっている。そして、その生き方は他人に伝わり、他人の生き方に大きな影響を及ぼすのである。

= お知らせ =

第7回 いのちの光3.15 フクシマ

～3.15から9年フクシマが背負ってきたもの 伝えつづけるもの～

「2011年3月15日」

それは、東日本大震災により東京電力福島第一原子力発電所が3度目の爆発を起こし、フクシマへと運命を変えた日です。福島第一原発から約25kmの距離にあるカトリック原町教会でのミサによる祈りと、現地の人々の声を聴き、「いのち」のあり方について共に考え、メッセージを発信していきます。

翌日の元寺小路教会では講演会を開催いたします。ぜひご参加下さい。

2020年3月14日（土） 13:30～16:00 （13時開場）

ミサ 司式 さいたま教区長 マリオ 山内倫昭 司教

現地の声 講師 伊藤 延由氏（飯館村在住）

会 場：カトリック原町教会（福島県南相馬市）



マリオ 山内倫昭 司教

2020年3月15日（日） 14:00～16:00 （13時開場）

講演会 講師 伊藤 延由氏（飯館村在住）

会 場：カトリック元寺小路教会 大聖堂（宮城県仙台市）

※14日、15日とも参加費無料・申し込み不要（当日はカンパをお願いします）



伊藤 延由氏

主 催：「いのちの光3.15フクシマ」実行委員会
問い合わせTEL : 090-2022-4007(木元)
Mail : inochinohikari315@yahoo.co.jp
後 援：カトリック仙台教区

編集後記

今回は、フランススコ教皇来日特集ということで、随分緊張しましたが、なんとかでき上りました。仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております投稿は、随時受け付けますので、下記のメールあてにお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

（上野 隆）

sendaikyoukuho@gmail.com

次号発行予定日 4月12日（日） 原稿締め切り 1月末日